

ハリコフの最初の消費組合(一八六六—七一年)と

ニコラーイ・パールリン

——南ロシア(ウクライナ)の初期協同組合運動史から——

はじめに

一八六一年の農奴解放につづくロシアにおける社会運動史の研究のなかで、協同組合運動⁽¹⁾についての研究はわが国でも、またソ連や欧米の学会でも近年殆んど忘れられていた領域に属している。しかし、ロシアの近代化過程において、「下からの」改革運動のひとつとしての消費生活協同組合運動のもち得た意義は社会的にも経済的にも決して小さなものではなかった。⁽²⁾ 帝制時代における幾多の受難と盛衰を経て、その運動は十月革命前には全国を覆う巨大な大衆的社会組織にまで成長していたので

ある。帝制期の協同組合はレーニンの労働政府のもとで社会主義を構成する重要な社会機構として吸収、再編され、今日世界最大規模の協同組合としてのソ連消費生活協同組合の源流ともなっている。⁽³⁾

ここに紹介するハリコフの最初の消費生活協同組合(以下、消費組合と略記する)は、ロシアやウクライナにおける初期消費組合運動のもっとも先駆的な実例であり、パールリンはその指導的人物であった。⁽⁴⁾

(1) 筆者が本稿で協同組合と呼んでいるのは、ロシア語で「кооперация」「кооперативное товарищество」または「кооперативное общество」と呼ばれるものである。ま

今井義夫

た、消費組合と呼んでいるのは、消費生活協同組合または生活協同組合のことであり、ロシア語では「народно-хозяйственное объединение」または「народно-хозяйственное общество」の意味で、前者の一部である。文中では広義の場合を主として「協同組合」、消費生活の合理化を目ざす狭義の協同組合の場合は「消費組合」と書くのを原則としている。

(2) 拙稿「ロシアにおけるロバート・オウエン思想の摂取と協同組合運動の創成期をめぐって」、『ロバート・オウエン協会年報Ⅲ』一九七八年所収・参照。

(3) 拙稿「ソ連・東欧における協同組合の現状と課題——ソ連・ポーランド・チェコスロヴァキアの協同組合運動の現地視察報告——」、『工学院大学研究論叢』第十九号・一九八一年・参照。

(4) 本稿の資料としては、モスクワのレーニン名称国立図書館、レニングラードのサルトルウイコフ・シチエドリン名称公共図書館の協力によって、ソ連でも稀観本に属するジーベルやバーリリンの協同組合文献を閲覧することができた。またバーリリンのイギリス協同組合宛の手紙の掲載紙の発見のためには、マンチェスターの協同組合連合本部付属図書館の協力を得た。

拙稿「英国とロシアの消費協同組合運動の源流をたずねて——資料探索の調査旅行報告——」、『ロバート・オウエン協会年報Ⅵ』一九八一年所収・参照。

一 一八六〇年代のロシアの消費組合運動とハリコフ消費組合の設立

ロシアに西欧の協同組合思想が導入されたのは、一八二〇年代からである。ロシアの知識人たちの間には、ロバート・オウエンやフリーリエ、サン・シモンらの名はその協同組合思想とともにかなり広く知られていた。とりわけその思想は一八四〇～六〇年代のロシアの急進的民主主義思想家たちの間で、ロシアの変革のための思想として摂取された。ゲルツェンがサン・シモンやオウエンの社会改革思想に強い共感を示したことや、チエルヌイシェフスキやドブロリユーボフなどが、フリーリエやオウエンの思想の宣伝に努め、ロシアの未来を協同組合的社会主義として構想し、若い世代に大きな影響を与えたこともすでに知られている⁽¹⁾。彼らの協同組合思想には伝統的なロシアの農民共同体やアルテリを基礎とする独自の発想が見られたが、それらはいずれも政治的弾圧の下で実践的な問題とはなり得ず、理論的試みに終っていた。ロシアにおいて西欧的な協同組合運動が実際に活動しはじめるのは、一八六一年の農奴解放が行われた後の一

連の近代化の過程においてであった。政府の制限の緩和によって、一八六五年頃からロシアの各地で西欧流の消費生活協同組合を模した消費組合が創設された。その数は登録されたものだけでも、一八六六年に四〇余組合におよび、一八七〇年には七六を数えたが、政府の圧力や財政的条件の不備、社会の無理解や活動家や組合員の慣れなどでその多くが短命に終った。しかし、一八六五年から一八七〇年の六年間をロシアの消費組合運動の創成期と呼ぶことができる。その後一八七一年から一八八〇年までの衰退期を経て、やがて、一八八一年からの漸次的増大、強化の時期を迎えるのである。(第一表参照)

創成期のロシアの消費組合運動を支えたのは、西欧の協同組合運動の思想をとり入れるのに熱心な知識人(インテリゲンツィヤ)の努力であった。一八六九年に『消費組合論(Потребительная общества)』を著わしたキーエフ大学の経済学者ニコラーイ・ジーベル教授(Николай Иванович Зибер, 1844—88)もその一人である。彼はマルクスの『資本論』のロシアにおける最初の理解者・紹介者として知られているが、消費組合運動の理論や実際についての紹介でも先駆的な人物であった。

第一表 ロシアの消費組合の増加 (1865—1913年)

時 期	年	公認組合数	年間平均増加数
I 創 成 期	1865—1870年 (6年間)	76	12.6
II 衰 退 期	1871—1880年 (10年間)	44	4.4
III 漸次的強化・増大の時期	1881—1905年 (25年間)		
a)	1881—1891年 (11年間)	157	14.3
b)	1892—1897年 (6年間)	332	55.3
c)	1898—1905年 (8年間)	1198	149.7
	(25年間小計)	(1687)	(67.5)
IV 大衆運動への転化の時期	1906—1913年 (8年間)	9554	1198

(出典) А. В. Меркулов, *Исторический очерк потребительной кооперации в России*.
Москва, 1915.

ジーベルはその『消費組合論』の前半で主に理論を論じ、後半では西欧の消費組合の実例として英国のロッチデイル公正先駆者協同組合、北イングランド協同組合やフランスのリールの協同組合「ユマニテ」、ドイツのシエルトツエ・デーリッツチュの組合などの状況や協同組合運動へのラッサールの影響などに言及した後で、ロシアの消費組合運動について実例をあげて紹介している。

ジーベルはロシアにおける消費組合運動を在来のロシアの民衆の互助的共同組織としてのアルテリ (aprem) と区別している。⁽⁴⁾

ジーベルによれば、ロシアの消費組合の規約の特色は、組合の構成の基礎に英国やドイツの組合の原理をとり入れた極めて複合的な性格をもち、さらに独自の要素を加えていることであるという。彼は一八六六年から一八六九年までに創設されたロシアの消費組合として知られているものを四十二組合あげている。⁽⁵⁾そしてその多くが南ロシアに存在している点を指摘している。次に、ジーベルがあげた四十二の消費組合の所在地を示そう。

一八六六年に創設されたのは次の七地点である。ペテルブルク、ハリコフ、ブスコーフ、ペルノフ、レヴェー

リ、ミターヴァ、デールブト。一八六七年には次の三地点。オデッサ、クールスク、リバーフ。一八六八年には二十一地点。ポルタワ、レベダイン、キーエフ、モスクワ、カザニ、キシニョーフ、タガンローク、ニコラーエフ、ウラール、エステリノスラフ、サラートフ、ペーザ、カシモーフ、ニジエゴロート、ヘルソーン、ヴラナヴィンスク、アーストラハニ、クビヤンスク、スパースコエ、カルーガ、サマラー。一八六九年には十一地点。ボローゼン、パールタ、チフリス、ケルチエン、エリザヴェートグラート、カローチエン、ワルシャワ、セヴァストローポリ、シムフェローポリ、スタヴローポリ、イルクーツク。(第一図参照)

ジーベルが指摘したように、南ロシア(ウクライナ)は初期のロシアの消費組合運動の中心地であった。⁽⁶⁾一八六五年から、一八七〇年にかけて存在した六二の登録組合のうち十六がこの地方にあったという記録もある。⁽⁷⁾この地方が黒海とそれに注ぐドニエプル河をひかえて、地理的に商業や工業に適し、西欧との交流の盛んな地域であったこと、キーエフやハリコフのような文化的中心地に進取の気性の知識人を擁していたことなどがその原因

(5) ハリコフの最初の消費組合 (1866—71 年) とニコラーイ・パールリン

第一図 ロシア初期消費組合分布図 (1865~1870)

(地図上の地名は消費組合の所在地を示す。◎印は二つ以上の組合の存在を示す。)



であろう。

ロシア消費組合運動の先駆者ニコラーイ・パールリンの名と結びついたハリコフの消費協同組合はそのうちでも最も注目すべき存在であった。ハリコフは今日人口一四四万(一九七九年)を超えるウクライナの一大中心都市であるが、そのはじまりは十七世紀半ばにロシアの南部国境を守る城塞地としてつくられたものであった。一八六一年にはすでに人口五万人を超える商工業の中心地で、商店は一、五〇〇以上、工業は洗毛工場、煙草工場、鑄物工場、金屬熔鋸所、煉瓦工場、石鹼工場などが操業していた。文化的にもハリコフはすでに一八〇五年に大学をもち、一八五五年には獣医学校も創立されていて、この地方の文化的中心地となっていた。住民は半ばロシア化されたウクライナ人が多く、官吏と商人はロシア人、労働者、手工業者、村人たちはウクライナ人から成っていた。

ハリコフの消費組合の創設のイニシアチブをとったのは、ここの大学の教授たちを中心とする知識人たち(インテリゲンツィヤ)の小サークルであった。このサークルには、七〇〜八〇年代の政治・社会活動家として知ら

れるE・C・ゴルヂェーニコ教授やH・H・ベケートフ教授、鉄道員監督官のA・A・ブリリアントフ⁽⁸⁾がおり、パールリンもこのサークルに接近し、その思想的影響をうけていたのである。

彼らの目ざしたのは、ロッチデイル式の民主的な消費組合を創設することであった。ブリリアントフは、その点を考慮して次の六つの原則を立てている。(一)事業の遂行は自己の手段によるべきで借入資本やクレジットに頼るべきでない。(二)商品の販売は市価で、掛でなく現金で行う。(三)組合員だけでなく、非組合員にも販売する。(四)各人の買入れに応じて、それぞれの枠内での利益の配分。(五)事業の遂行での公開性と報告義務。(六)商品の良質性と正しい度量衡⁽⁹⁾。

これらの原則は一八六六年に彼らがハリコフ消費組合の規約を作成する時にとり入れられた。最初の規約によれば、消費組合の目的は組合員の必要消費品の購入についての節約と事業からの利益の配当にあるとしており、会員資格は両性、全階層におよぶとされている。会員株は五〇ルーブリ(後に四八ルーブリに変更)で、運営のため管理部と監査委員会が置かれることになる。十月二

十九日には第一回の総会が開催され、当日参加したのは二十六人であった。ハリコフ消費組合 (Харьковское товарищество потребителей) の正式の発足は一八六七年一月二十六日であった。

(1) 拙稿「ロバート・オウエンとロシアの思想家たち」、『社会思想』三—四、一九七四年、参照。

(2) А. В. Меркулов, *Исторический очерк потребительной кооперации в России*, Москва, 1915.

(3) *Потребительная община*, Сост. Н. Знебер, Киев, 1869.

(4) ジーベルは、消費組合と、アルテリとを区別して、前者はヨーロッパ的形式の点で新しく、その将来に関心のある社会層のために構成される。そして後者は独自の共有倉庫もなく、出費者への配当もない民衆の互助組織とみている。Там же, стр. 71—73.

(5) Там же, стр. 97.

(6) ジーベルは、ロシアの一八六〇年代の消費組合の多くが南ロシア (ウクライナ) 地方に存在していると指摘しており、ハリコフの組合以外にもキーエフ、オデッサ、ニコラーエフの消費組合の例をあげている。キーエフの場合には彼自身の居住地であり、その記録もハリコフに次いで詳しい。組合規約は一八六八年十月につくられ、同年、十二月十九日に第一回の総会を開いて評議員を選出したが、この

総会には約一〇〇人の出席者があったという。そして一八六九年四月十二日に売店を開いて営業を開始し、五月半ばには資本金五、五〇〇ルーブリ、組合員二七五人に達したと記している。キーエフの消費組合運動もその指導的役割を果たしたのはキーエフ大学の教授たちを中心とする知識人であり、ジーベルもおそらくその一人であったと思われる。Там же, стр. 93—95.

(7) В. И. Марков, *Пионеры южно-русской кооперации*, Н. П. Балаин и его сотрудники, 1919, стр. 67.

(8) Александр Андреевич Бриллиантов)。パールリンの協力者で、熱心な協同組合運動家。ハリコフの鉄道員監督を勤めるかたわら、ハリコフの消費組合の創設と運営に貢献した。彼はその誠実さ、慎重さ、協同組合運動への献身的な奉仕によって組合員から尊敬され、信頼されていた。パールリンは彼を「消費組合の魂」と呼んだといわれる。ハリコフの消費組合が破綻した後も、彼は転動したエカテリノスラフで消費組合運動にとり組んだといわれる。Там же, стр. 91.

(9) Там же, стр. 12.

二 ハリコフ消費組合の発展と破綻

パールリンの名と結びついた最初のハリコフ消費組合

の発足からその破綻までの約四年間の経緯については、先にあげたジーベルの著書とパールリン自身の記録が当時の実状を伝える貴重な資料である。それらはいずれも創成期のロシアの消費組合の状況を知るための同時代人の記録として興味深い。まずジーベルの記録によってハリーコフ消費組合の発足当初の発展をあとづけ、次いでパールリンの記録によって同組合の破綻を招いた事情を確かめてみよう。

前章でもふれたように、ハリーコフの消費組合の最初の規約は一八六六年十月に制定され、後に若干の変更が加えられた。ジーベルによれば、この新たに編纂された規約では、組合はその所有倉庫からの商品販売の権限や組合員に必要な製品の製造施設を設置する権限をもつことになった。また、組合員は組合財産および予備資本の利益部分を除いた資本の六パーセントと組合売店での購買金額の割合による利益配当金を受けとることが規定された。⁽²⁾ この利益配分の規定はその後の組合の混乱の原因となるのである。

同年十二月二十二日の会議では、代表幹事たちによって予算と将来の企画が審議され、その結果、組合の資本

金が二、五〇〇ルーブリに達したならば直ちに消費組合の売店を賃借りして開業することが決議された。この決議によって一八六七年一月二十六日に第一売店が開店した。開店第一日目は、売店はさながら無人の観があったという。なにも並んでいない裸の陳列棚、床の上のあちこちに置かれた紙袋、いくつかの石鹼棒、十くらの麦粉のかます、それらがすべてであった。それでも次第に状況は改善され、同年五月末にはすでに第二売店の問題がもちあがり、九月には開店の運びとなった。⁽³⁾

組合の経営は順当に見えた。ジーベルの記録によれば、組合の取引が開始された日、すなわち一八六七年一月二十六日に組合員の数は一八一人、彼らの納入金は二、四四九ルーブリに達していた。最初の四カ月にさらに七四人が加わり、この時の納入金は二、二一四ルーブリ八〇カベーク、八カ月目には組合に二五人が加入し、六六二ルーブリ七九カベーク増えた。十二カ月目には七六人が加入して、二、〇五二ルーブリ七八カベークの納入金に加わった。一八六八年一月一日までに七人の組合員が脱退して、全部で三百四十九人が残り、納入金は七四〇八ルーブリ八七カベークにまで伸びた。⁽⁴⁾

売り上げに關しても順当で、「最初の四カ月に自己商品と委託商品の売上げは一一、九一六ルーブリ九八・二分の一カベーク、八カ月目は一一、八四四ルーブリ八三・二分の一カベーク、十二カ月目には二七、六八四ルーブリ一七・四分の三カベーク。組合の存在した一年間を通じて売上合計五一、四四五ルーブリ九九・四分の三カベーク、これに加えて切手の売上げの利益一三ルーブリ、この間の利益総計五、八〇二ルーブリ三五・四分の一カベーク、これから支出部分の合計二、七二一ルーブリ九五・二分の一カベークを差引くと、純利益は三、〇八〇ルーブリ三九・四分の三カベークすなわち取引高の六・二五パーセントであつた。この利益は次のように配分された。組合員たちは資本金の五パーセント——二二四ルーブリ五一カベークを受けとつた。仕入れ金額の平均五パーセントは組合員の購買割に利益配当金とされ、残額は自己資本および予備資本を増やすためと、設備費の減価償却および管理部組合員への報酬に使用された。しかし組合から年間に一六、〇四〇ルーブリ六・四分の一カベーク、すなわち三一パーセントの買入れをしていた非組合員は何ら利益の配分を受けなかつた。」

ジーベルはその後組合の経営が順調に進んでいることを示す数値をかかげている。一八六九年はじめには、組合員数も資本もそれぞれほぼ二倍に達し、取引高は三倍、利益は一・五倍に達し、第二次年末の純益は以前とほぼ同じく五パーセント、すなわち三、九三二ルーブリに達したと記している。⁽⁶⁾しかし第二年目にすでにハリコフ消費組合の破綻のきざしが現れはじめていたのである。この点についてジーベルは、この報告では一切気付いていないようである。以後の経緯はパールリン自身の報告によつて知ることができる。

パールリンの報告とは、一八七〇年に出版された彼の著作『ロシア消費組合の最初の記念小冊子 (Первая памятная книжка русских потребительных обществ, 1870)』に収められた「一八七〇年二月と三月のハリコフ消費組合総会における事件についての覚え書き (Заметка об истории на общих собраниях Харковского товарищества потребителей в феврале и марте 1870 г.)」である。次にこの記録をもとにハリコフ消費組合の危機と破綻にいたる経緯をたどらう。

組合の内部危機が表面化したのは一八六九年の年次集会の席上である。一八六九年の売上高が一八六八年のそれを上まわったのに、年間純利益は下まわったことが明らかになった。はじめは計算上の誤りと考えられたが、再度の計算によってその事実が確かめられ、その原因が規約による組合員の利益の配分がもとで純利益が低下せざるを得ないことがわかったのである。以後、組合の内部ではこの利益配分の規定の当否をめぐる激しい議論と対立が生まれることになる。この対立は帰するところ消費組合の目的をどう考えるかという根本問題にかかわる対立であった。

組合運動からの利益は将来に期待し、当面は組合の発展のために利益配分を抑制しようと考えた人々は「未来党」(Партия будущего)⁽⁷⁾と呼ばれ、バールリンやブリリアントフらもこれに属して、管理部でも多数を占めていた。この方針に不満で管理部に反旗をひるがえした組合員は「十七人党」もしくは「叛逆者党」(Партия семнадцати или партия инсургентов)と呼ばれる組合内のグループをつくり、管理部を激しく批判した。バールリンによれば、彼らはもともと協同組合の理念より

も、組合への出費による利殖をめざしていた保守的な商人が多く、組合売店の従事員や青年・婦人組合員にたいして敵意すらもっていたといわれる⁽⁸⁾。

「未来党」の構成員は、バールリンによれば多くはなにか協同組合の理念により忠実で、比較的一定した志向をもっており、組合総会で解決すべき身近な現実的諸問題についても全員が一致して対応するという点で、「十七人党」にたいする優位を保っていた。しかし、彼自身が認めているように「未来党」のなかでも組合の将来の方針についてまだ統一的な見解があるわけではなかった。ある者は組合の事業として食肉取引の施設をつくることが必要だと考え、またある者は組合をなにか組合銀行のようなものに変えるべきだと考えていた。それ以外にも、工場方式で食品加工業を發展させて組合の取引を拡大すべきだと考える者や組合はクラブ、ホテル、図書館などの施設づくりを優先すべきだと考える者もあった。バールリン自身は、組合は小規模工場に注意を向け、労働者のアルテリを組合の中に結成すべきだと考え、また取引の拡大のために取次や仲買の業務を行う事務所を設けるべきだとする人々に属していた⁽⁹⁾。そこにはさまざまな協

同組合観や期待が混在していたのである。

一八六九年に選出されたハリコフ消費組合の新評議会では、「未来党」の人々は利益配分が組合の目的でないことを確認し、そのほか、消費組合間の連絡が不可欠であること、組合活動の公開性の必要などについて合意した。「十七人党」の役員は最後の点で反対したが少数派であったという。この評議会ではそのほかにも、組合の詳細な将来計画をつくることや管理の改善、組合従業員のアルテリの規約の改善、生産者への組合の接近策、取扱商品の品質向上システムなどについて合意が得られている。これら合意を得られた項目を盛った新規約案は全体会議にかけられて、一部を除き承認された。しかし、利益配分の件に関しては紛糾は免れなかった。

評議会は全体会議に利益配分の規約を見直すことを提案し、純利益から設備の償却費を控除することや非組合員の利益配当を買入額の二パーセントにすることは異議なく可決された。次に組合員の利益配分の見直しの件では、評議員会側が買入額の三パーセントとする提案をし、パールリンはこれを二・五パーセントにすべきだと主張した。これにたいしてチュドフスキが利益配分をやめ

て、その分を自己資金の中に繰り込むべきだと提案し、パールリンもこれに賛成したことから議場は騒然となった。この提案をめぐる評議会の意見は分かれ、「十七人党」は提案に激しく抗議した。彼らは会場において少数派にとどまったが、その反対で会議は続行できず、対決は後日にくり越された。

次の会議のはじまる前に、評議会の中で、利益配当金の廃止は規約に違反しないかという問題がもち上り、議長の裁決で配当金の支給が決められた。しかし、その金額は組合員にたいしては買入額の〇・一パーセントという低率とすることに多数の意見が一致した。席上「十七人党」のチリコフからの激しい非難があったが、二つの党の戦いは総会にもちこされ、利益配分〇・一パーセントという評議会の提案採決をめぐる総会は紛糾した。利益配分の低率に不満な組合員は「十七人党」を支持し、総会の決議に反対する公開状には三十七人の署名があった。管理部の委員の選出では「十七人党」から好まれていないブリリアントフが一〇〇人弱の投票のうち再度の投票で賛成六六票、反対三三票で当選した。各種の委員会役員選出でも、「十七人党」からは当選者が稀で、

主に「未来党」からの候補者が当選した。⁽¹⁰⁾

総会では議長ヤンコヴィツチが前の総会は合法的でない、あるいは無効だという意見をもっており、これに力を得た「十七人党」は総会会議場で頹勢の挽回に全力をあげた。しかし、結局、総会の合法性の問題および配当金の〇・一パーセント問題は、六一対五九という際どい差で承認された。この結果を見て、「十七人党」とその同調者たちは大挙して組合を脱退し、納入金を引きあげ、別の消費組合を設立した。脱会者は二〇〇人、引き上げられた資本金は六、〇〇〇ルーブリに達した。この事件は旧組合への信頼を動揺させ、やがて組合の破綻につながってゆくのである。

一八七〇年はハリコフ消費組合にとっての深刻な危機の年であった。パールリンは前記の「覚え書き」のなかで、事件後に組合の食品売上げの伸びが止り、低落させた⁽¹¹⁾と記している。また一時は第二売店の経営を停止せざるを得ないほど経営への被害は甚大であった。組合員は事業の回復のために全力をつくしたが回転資本の不足をはじめ困難な条件が重なった。

一八七〇年五月から組合はミネラル・ウォーターの製

造工場を操業したり、イギリスのウィラー・アンド・ウィルソン会社の代理店として最新式のミシンの取扱い業務を開始している。その他、既製服店、工場製品取扱い、小料理店、コーヒーやパンの販売店、食肉取扱業務などの新企画をたてている。パールリンはこれらの企画が現在の手持の資本で可能であると考えていたように、従業員のアルテリの問題、規約の改訂の問題、さらに新しい発展の条件として、生産労働者の組織との連帯の必要についても意欲的に言及している。彼はまたこの頃、同志のコズロフとともに一八七一年一月に全国の消費協同組合の最初の連合大会をハリコフで開催するという企画に熱心にとり組んでいた。

しかし、これらの野心的な企画は相次ぐ不測の事態によって裏切られ、ハリコフ消費組合は一八七一年に破産に瀕する。彼らの消費組合全国大会開催許可についての請願も政府から素気なく却下された。⁽¹²⁾ それでも一八七二年二月付のパールリンから英国協同組合名譽書記ウィリアム・ベアに宛た手紙には、ひきつづき「ノーヴィ・バザール（新市場）」と称する協同組合的な取次販売店を開く計画とそのための援助要請を伝えている。

パールリンとハリコフ消費組合の困難は、同じ頃にロシア各地に生まれはじめていた消費組合運動についても大同小異であった。一八七一年以降ロシアの消費組合運動は以後十年にわたる冬の時代を迎える。

- (1) *Потребительный общества*, Сост. Н. Энбер, 1869, стр. 89.
- (2) Там же, стр. 89.
- (3) Там же, стр. 90.
- (4) Там же, стр. 90—91.
- (5) Там же, стр. 91.
- (6) Там же, стр. 93.
- (7) *Первая памятная книжка русских потребителейных обществ*, Сост. Н. П. Баллин, Санктпетербург, 1870, стр. 32.
- (8) Там же, стр. 33.
- (9) Там же.
- (10) Там же, стр. 36.
- (11) Там же, стр. 37.
- (12) 破産の直接の原因は、反対派の人々にそのかされた食肉業者が納入品の代金支払い問題で組合を告訴したことや、同じく高額出資者の一婦人が二、〇〇〇ルーブリを超えるその資金を一度に組合から引き上げたことなどである。

た。В. И. Марков, Указ, соч., стр. 17.

(13) 全国消費組合大会開催許可請願にたいする政府の不可通知には、協同組合の活動はそれぞれの都市内で行うべきで、組合間の連携は許されないと記されていた。当時のロシア政府が協同組合運動の拡がりや連帯をおそれ、これに制約を加えようとしていたことがわかる。

Там же, стр. 85.

III パールリンの協同組合思想と彼の協力者たち

ロシアの生んだ国際的な協同組合研究家 B・トトミアンツは、パールリンの略伝の冒頭で彼を「ロシア協同組合運動の最初の伝道師⁽¹⁾」と呼んでいる。

ニコライ・ペトロヴィッチ・パールリン (Николай Петрович Баллин, 1829—1904) は、エカテリノスラフ県の高級官吏の家に生まれ、⁽²⁾ ベテルブルクの法律学校で学び、卒業後、元老院に就職して、シムビルスク県やエカテリノスラフ県で司法監督官として勤務した当時のいわゆる雑階級人出身の知識人 (ラズノチーネツツ・インテリゲンツィヤ) の一人である。彼はクリミア戦争敗戦後のロシアの改革期に社会問題に強い関心をもち、役所勤めに満足できなくなって、一八六〇年の半ばに官職を

捨ててハリコフに移り住んだ。彼はそこでさまざまな社会運動や啓蒙活動に参加したが、とりわけ消費組合運動に熱中した。

ハリコフにおける消費組合運動にはパールリンの影響が強くあらわれているといわれる。協同組合運動で彼が力を入れたのは、その文化的啓蒙活動の側面であった。

彼の伝記研究者マルコフによれば、ハリコフ消費組合の規約修正草案の中に、教育委員会の設置についての条項があるのは、パールリンの協同組合觀に合致しており、その内容は彼がすでにハリコフの公共図書館や読み書き協会などを通じて文化活動に取り組んでいた現実を反映しているといわれる⁽³⁾。

まだ協同組合運動になじみの少なかった当時のロシアで、パールリンがその思想の普及のために各種の啓蒙的出版活動を試みたことは特記さるべきであろう。実際に彼が編集した協同組合関係の文献としては、前述の『ロシア消費組合の最初の記念的小冊子』などがあるが、それは、今日初期のロシア消費組合運動史の貴重な記録文献となっている。その他イギリスをはじめ西欧の協同組合についての文献の翻訳や紹介がある。これらは、いず

れも彼のより大きな出版計画の一部にすぎなかった。彼の出版計画では、ハリコフ消費組合略史、ホリヨークのロッチデイル公正先駆者組合史をはじめとする協同組合関係文献のほかハリコフの公共図書館や婦人日曜学校史、読み書き協会史など教育関係の文献、および協同組合によって貧困を消滅させる方法について、集合住宅（ファミリステール）やチーズ製造のアルテリなどの文献を含んでいた⁽⁴⁾。この計画が未完に終わった一因は、彼自身が自覚していたように当時のロシアで出版の自由が厳しく制約されていたからであった。

パールリンはこの期間の自らの体験を通じて、協同組合の発展のためには言論や出版の自由が不可欠の条件であると考えるにいたった。

パールリンの協同組合活動で画期的なことは、ロシアの協同組合運動を海外の協同組合運動に結びつけた国際性である。一八六九年に、パールリンはハリコフの協同組合の経営を改善し、海外の協同組合との連帯をつくり出すために西欧諸国の協同組合を歴訪した。

まず、ドイツの各地で消費組合運動を視察した後、イギリスに渡ったパールリンは、ロンドンの協同組合を訪

れてラドロウやその他の指導者たちに会い、また、ハリコフ消費組合のための商品を購入している。その後、消費組合運動発祥の地ロツチデルやマンチエスターを訪れ、再びロンドンに戻って、折から開催されていた全英協同組合第一回大会にロシアの協同組合の代表として参加するという晴れがましい経験をしている。⁽⁵⁾ ドイツでは

シュルツェ・デーリツチュと会い、パリではフリーエ主義者たちの協同組合運動を見学したが、この視察旅行を通じてパールリンがもっとも感銘をうけたのは、イギリスの協同組合とその指導者たちであった。彼はロツチデルの消費組合をロシアにおける協同組合運動の手本としただけでなく、それを全人類的な協同事業の先駆とみなした。そして自ら北イングランド協同組合に組合員として加入している。パールリンはロシアに西欧諸国の協同組合運動についての情報をもたらし、他方、西欧の視察旅行中に多くの協同組合員に接してロシアの協同組合の状況を彼らに伝えた。帰国後もイギリスの協同組合指導者たちと文通をつづけている。彼のロシアからの報告は、イギリスの協同組合誌上に再三掲載された。それらの報告の中で彼はロシアにおける協同組合運動の困難な

状況や将来への抱負を記し、イギリスの協同組合員の理解と協力を要請している。⁽⁶⁾

パールリンはまた、ロシア国内の消費組合の全国的連帯の必要を認めその実現を試みた最初の人物の一人とみなされている。すでに前章でも言及したように、彼はハリコフで一八七一年一月に全国大会を開催する計画を立て、その準備のために各地の消費組合にアンケートを送った。政府からの大会開催の許可がなかったために、この計画は実現しなかった。しかしそのアンケートへの回答によって各地の二十余の消費組合の状況が明らかにになり、それらが彼の前記の書物『記念的小冊子』の中に資料として収録され、今日に伝えられることになったのである。

ここで、パールリンの協同組合思想について少々ふれておこう。すでに見たように彼の協同組合思想はロツチデル方式の消費組合思想に強く影響されていたが、その内容は模倣というよりむしろきわめて独創的なものであった。

もともと、彼の協同組合への関心はフリーエのファランステールへの共感に根ざしていたといわれる。これと

関連して、彼がペトラシエフスキイ・サークルやチエルヌイシエフスキイの思想的影響を受けていたことを指摘するものもあるが、彼の伝記には空白部分が多いのでその点を確認することはむずかしい。しかし、彼がフリーエの思想をはじめ西欧の社会主義思想をロシアで宣伝しようとしたペトラシエフスキイ・サークルの出版物やチエルヌイシエフスキイ著作からの影響を受けていたということは容易に想像できる。ハリコフでの協同組合運動史についての報告予告の中で、パールリンは協同組合の思想家として、フリーエ、ビュシエ、レクラール、ゴダン、ロバート・オウエン、マルクス、ニール、ホリヨーク、シウルツェ・デーリツチュ、ライファイゼン、ツイーゲン、ツェザレ・ド・ババの十二人の名をあげていたという。⁽⁸⁾これらは、彼がいかに広く学んでいたかを示している。ここで彼がマルクスを協同組合思想家の一人としてあげているのは興味深い。しかし、当時の彼の協同組合思想にはマルクスの階級闘争や社会主義革命の理論を認める傾向は見られない。彼は協同組合の役割として、労働者の連帯を夢みていただけでなく、資本と労働の連帯すら考えていたといわれる。

協同組合の理論家としてパールリンは、シウルツェ・デーリツチュには否定的であり、ラッサールの傾向にも共感できなかったし、シャルル・ジードとブルードンを対比して、前者の側に立ったといわれる。また、同時代のロシアの協同組合の指導者で貴族出身のヴァシリチコフには批判的であり、むしろナロードニキの理論家ラヴロフや急進的な民主主義者・シエルグーノフをその革命思想は別として、尊敬していたといわれる。パールリンはある種のナロードニキであるとする主張は、その意味でも理解できる。さらに、彼がナロードニキの革命組織「土地と自由」に近かったと指摘する説もあるが、その詳細は明らかでない。⁽⁹⁾彼が民衆の解放に強い関心をもっていたことは確かである。しかし、その方法としてはあくまで啓蒙的な方法による平和的な解決を望んでいたようであるし、彼の関心は農民たちよりもむしろ都会の住民たちを中心とした新しい経済的文化的改革運動としての協同組合運動の創造に向けられていたのである。

パールリンの協同組合観をもっとも端的に示しているのは、彼自身の手になる「協同組合の箴言 (Копейчатые записки)」である。それは彼が一八七〇年に出

版した例の消費組合に関する記念小冊子に掲載されており、全部で十章の短文から成っている。

その内容の第一の特色は、協同組合の基礎として相互共感、相互友誼をあげ、協同組合とは「愛と友情の実現である」⁽¹⁰⁾と規定していることである(第一章)。西ヨーロッパの例などからこの意味を単純にキリスト教的なものと結びつけることは誤りであろう。かつてロバート・オウエンは既成宗教の權威を否定することによって、宗派を超えた人間的連帯とその実現としての協同組合的共同体の可能性を見出した。また、チェルヌイシエフスキイは、唯物論的人間学の上にフリーエ的共同社会を構想した。両者を尊敬するパールリンがその先例にならって、人間的なき^なず^なとしての愛や友情を協同組合の基礎とみなしたと理解するのが自然であろう。

パールリンの協同組合観の第二の特色としては、協同組合活動の広がりや教育の水準の高まりと結びつくとして、民衆教育を重視していることである(第三章)。民衆教育とは民衆の発展を目的とすべきで、彼らに何かを吹き込むことではなく、彼らに生産のための手だてを与えることだとする彼の主張には、当時彼が尊敬し、文通

していたトルストイの影響を感じさせるものがある。第三の特色としてあげられることは、パールリンが協同組合の目的を生産活動と結びつけていることであろう。彼は消費組合を「生産の目的をもった消費のための集約システム」と規定し、その目標として消費に必要な手段の生産のための労働を軽減し、合理的な消費を発展させ、その結果として、人間の生産能力や生産嗜好を発達させることであるとしている(第五章)。消費組合を生産協同組合への過渡的段階とみなすこのような傾向は、ロツチデイルの消費組合原則をはみ出すものであり、生産の向上のための協同をもっとも重視するいかにもロシアの協同組合人らしい発想である。同様の志向がコズロフやジーベルの消費組合論にも見られる⁽¹¹⁾。

その他、第六章で「協同組合は革命的であるべきでない」と明瞭に規定しているのが特徴的である。また、あらゆる仲介業者の策略を無視して活動を公然化することが求められている。第九章では利益の配分は協同組合の目的でないと規定し、組合に提供される資本や労働には報酬が伴うべきだが、市価を上まわってはならないとしている点も注目される。協同組合間の連帯の必要を特に

規定していることも(第八章)いかにもパールリンらしい着想といえよう。

パールリンの協同組合観は、この箴言からもうかがえるように、理論的に一貫したもので、また体系的なものでない。しかし、多くの先見や理想が含まれている。その混然として、包括的な内容には当時のロシアの先駆的な活動家が協同組合運動に期待した多くの夢が反映しているといえよう。事実、彼は後に「協同組合の叙情詩人⁽¹²⁾」と呼ばれたが、口の悪い同時代人からは「夢想家」と呼ばれ、また反動的思想家からは頭のおかしな危険人物扱いをされていたのである。⁽¹³⁾

ハリコフの消費組合運動の性格は、パールリンのみでなく、その同志として活躍した人々の業績や思想を調べてみると一層明らかになる。すでに言及したブリリアントフ(第一章・注(8)参照)以外に、ここでは二人の活動家を取りあげてその経歴や活動の一端を紹介しよう。

ヴィークトル・セミョーノヴィッチ・コズロフ(Виктор Семенович Козлов)は南ロシアおよびハリコフの

協同組合運動のすぐれた活動家で、パールリンの親密な協力者であった。彼の父は貴族社会の指導的人物であり、母は農奴解放以前に自ら領内の農民たちに土地を与えた偉大なヒューマニストであった。コズロフは、はじめハリコフ大学に学び、途中でペテルブルク大学に移っている。彼は当時のナロードニキ学生の一人で、一八六一年には警察に逮捕されて投獄されるという経験もしている。その後、ハリコフで日曜学校運動に熱中し、民衆教育事業に尽力することを自己の使命と感じていた。そこで同じような関心をもって活動していたパールリンと出会い、ともに協同組合運動にとり組むことになる。

協同組合の理念を彼はハリコフ大学のベケットフ教授やゴルザエーニコ教授たちの講義に出席して学んだという。一八七一年にハリコフで全ロシアの消費組合大会を開催するための企画を立て、その準備を進めた中心的人物はほかならぬこのコズロフであった。⁽¹⁴⁾彼は消費組合の共同センターを創ることも計画していたが、その時すでにハリコフの組合は危機に瀕しており、その計画は政府の圧力で潰された全国大会の計画ともども未完に終わった。

ロシア人であったパールリンと違って、コズロフはウクライナ人としての民族意識を強く抱いていた。彼はウクライナの文化や伝統を愛して、自ら好んでウクライナの民族衣裳を着用したという。またウクライナの急進的な社会主義思想家М・П・ドラホマーノフを自分の同志とみなしていた。後年に、老いたコズロフをオデッサの住居に訪れた人物の問いに答えて、かつて自分がパールリンに協力したのは、彼がウクライナ人の運動に同情を示したからだと言ったといわれる。⁽¹⁵⁾コズロフは数理を得意とし、当時独自のすぐれた製図器(ディアグラムモメーター)の発明家として学界に知られていた。

エカテリーナ・セミョーノヴナ・ヂャーコヴァ(Екатерина Семеновна Дьякова)は、ハリコフの消費組合でパールリンに協力した教養ある女性である。一八六九年に裁縫ミシンの販売代理店と若いミシン女工の養成施設が消費組合の付属施設として設立されたのは、主として彼女のイニシアチブによるものであった。一八七二年まで存続したこれらの施設で、彼女は協同組合的原则による若い女工たちの教育を試みている。彼女のこれらの試みが、チエルヌィシエフスキイの政治小説『何をなす

べきか?』(一八六二年)のなかで、主人公の女性ヴェーラ・バヴローヴナが試みた協同組合的縫製店にならって社会変革の実現を目指したものであることは明らかである。

ヂャーコヴァは英語をよくし、自らイギリスの協同組合会議に英文の報告書を送ったが、その内容は出席者たちに感銘を与えたといわれる。また、パールリンの出版したウィリアム・ベアの『協同組合的土地所有』のロシア語訳(一八七二年)も彼女の訳業であった。

(1) *Труды кооперации и их думы*, Москва, 1919, стр. 111.

(2) トトミアンツは右の書物の中の自己の論文で、パールリンの生まれたのをホテルブルクとしてゐる。Там же. ここでは、マルコフの前掲書に依った。

(3) В. И. Марков, *Пioneры южно-русской кооперации*, стр. 22.

(4) Там же, стр. 58.

(5) G. J. Holyoake, *The History of Co-operation in England*, 1875, Vol. 1, p. 425. ヴェーレンリンの出席が記録されている。

(6) 拙稿「ニコライ・パールリンの英国協同組合員への報告書簡をめぐって」、『ロバート・オウエン協会年報』VII、

一九八二年所収(予定)・参照。

(7) *Советский энциклопедический словарь*, Москва, 1980, стр. 106.

ソ連の近年の百科事典で、ハールリンの名が載ったのは、この一九八〇年版の小事典がはじめてである。その短い記述の中に彼がストラシエフスキイ・サークルや「土地と自由」に接近していたことが記されている。

(8) В. И. Марков, *Указ. соч.*, стр. 57.

(9) *Советский энциклопедический словарь*, 1980, стр. 106.

(10) *Первая памятная книжка русских потребителейных обществ*, 1870, стр. 43.

(11) *Потребительные общества*, Сост. Н. Энбер, 1869, стр. 42.

(12) В. И. Марков, *Указ. соч.*, стр. 25.

(13) 当時の反動政治家として知られるボヘドノーツェフは、ハールリンのハリコフでの講演会についての彼の情報員からの報告をもとに、ハールリンを頭のおかしな人物で危険であると文部大臣宛に報告している。Там же, стр. 17.

(14) コズロフが全国大会のために準備していたのは次のような討議事項であったという。(一)もっとも利益のある合同商品仕入の方法、および「北イングランド協同組合」の方式による卸売販売のための協同組合施設について、(二)管理の改善とその経費の節約について、(三)消費組合が組合員

に大きな利益をもたらし、消費組合間および組合員間の連帯をもたらす方法、(四)消費組合を生産協同組合に成功裡に移行する問題、(五)組合の経営に関連する若干の問題および消費組合勤務者のアルテリの組織化に関する問題。

В. И. Марков, *Указ. соч.*, стр. 81.

(51) Там же, стр. 87.

あとがき

本稿でとりあげたハリコフの最初の消費組合運動とハールリンをはじめとするわずか三人の組合活動家たちの例によっても、この時期の消費組合運動がロシアやウクライナの社会運動としてもつ意義が決して小さくなかったことがうかがえるであろう。彼らの運動は十九世紀のロシアとウクライナの社会思想の様々な伝統と特徴を反映している。それはまた、ロシアの近代化の過程での西欧の社会運動の影響の実例としても、また相互の文化的交流の例としても注目すべきものである。

当時のロシアの協同組合運動史の研究は、これまでのわが国におけるロシア史研究において欠落していた種々の問題のひとつに過ぎない。しかし、この問題についての認識の不足はロシアの近代化や社会革命についての理

解を一面的なものにしてしていると筆者は考える。その意味でも、わが国におけるロシア史研究において、ロシア（ウクライナをふくむ）の協同組合運動史の研究は、今後の重要な課題のひとつとみなさるべきであろう。この

小論が、そのような関心をたかめるためのささやかな試みとして役立てば幸いである。

（工学院大学教授・一橋大学講師）